

15

カンニング談義

先輩「おや、珍しく勉強かい。」

後輩「はい、あした語学の試験がありますから。」

先輩「語学って、英語かなんか？」

後輩「いえ、英語のほうはなんとかなんですけど、ドイツ語の文法が苦手なもんですから、四苦八苦してるところです。」

先輩「で、その表を丸暗記しようってわけ？」

後輩「ええ、一夜漬けでは身につかないことはわかってるんですけど、ほかにしようがないんです、なにしろふだん怠けていたもんで。」

先輩「ふん。どろなわもいとこだな。でも、時間がないんじゃないじゃ、しかたがないよな。まさかカンニングするわけにもいかないし。」

後輩「ああ、カンニングといえば、高校時代の同級生にカンニングのうまいやつがいましたね。当人の話だと、なんでも十何回かやって、一度も見つからなかったって、いばってましたよ。実に巧妙で、ばれることはおろか、疑われたことさえなかったって言うんです。かえって、見られたほうのなんの責任もない生徒が逆に疑われたぐらいだって言いますから、名人なんですネ。」

5

先輩「いや、自慢してるようじゃ、ほんとの名人とは言えないな。おれの大学時代の同級生のなかにも、よくカンニングするやつがいたけど、そういう場合は、必要に迫られてやるっていうより、一種の趣味みたいなものでね。」

10

後輩「へえ、カンニングが趣味なんていう人がいるんですか。」

先輩「ああ、いるんだよ。勉強がよくできるやつでね、試験の準備だって、ちゃんと人並みにやるんだ。」

後輩「それじゃ、カンニングする必要なんかじゃないですか。」

先輩「そうなんだ。だから、いい点をとるためにひとの答案を見るんじゃないんだ。危険をおかしてまわりの人の答えを見ることが楽しいんだそうだ。ベルが鳴って解答用紙を提出したあとで、君のは八五点、おまえのは七〇点と、まわりの連中の成績を予告するんだ。その時の気分はなんともいえないなんて言ってたな。しかも、よほどの難問ぞろいの出題でないかぎり、その予想がぴたと当たるんだ。答案が戻ってきた時にみんなあつけにとられるわけさ。」

5

後輩「なんだか、怪盗ルパンみたいな話ですね。」⁽¹⁾

先輩「ところが、ある時、どうしても解けない問題が出たんだよね、数学で。

あとでわかったんだけど、出題者の勘違いで、条件が一つ足りなかった

10

んだ。学生はそんなことは知らないから、なんとかこじつけて答えを出

す。例のカンニングの達人、今度ばかりは余裕がなかったんだな。試験

監督の目を盗んで、周囲の連中の答案を見るには見たが、肝腎の自分の

ほうは解けていない。それで、いい加減に書いたやつの答えをそのまま

(1) フランスの作家 Maurice Leblanc

(一八六四～一九四一)の一連の探

偵小説の主人公 Arsène Lupin

写したらしい。それだけならまだよかったんだけど、その時に誤字までそのとおり書きちゃったんだって。魔がさしたとしか思いようがないよね。⁽²⁾○×式か選択肢の問題だったら、ばれないですんだわけだから、⁽³⁾気の毒^{どく}っていえば、気の毒みたいなものさ。」

後輩「やっぱり悪いことはできないもんですね。」

5

- (2) 正誤の判断を記号で表す出題方式。
 (3) 解答例を複数示し、その中から正解を選ばせる出題方式。選択肢の数によって四肢選択、五肢選択などという。

先輩「うん。こわいね。やっこさん、退学や停学の処分はまぬがれたものの、もちろん単位はもらえない。あいにくそれが必修科目だったもんだから、⁽⁴⁾とうとう留年するはめになっちゃってね。」

- (4) 必要な単位が取得できず、卒業が延びること。

後輩「運が悪いですね。ほんとのカンニングって言えるのは、見つかったその一回^{いっかい}だけなんですからね。」

10

先輩「でも、当人はばれてかえってさっぱりしたなんて言ってたよ。もし一度^どもばれずにそのまま卒業できてたらって思うと、ぞうつとするなんて。いつまでも気持ちの負担^{ふたん}になっただろうってことかな。」

後輩「ああ、なんだか、わかるような気がしますね。」

先輩「あれ、もうこんな時間か。ごめん、ごめん。試験の前日の書き入れ時

だっていうのに、すっかりじゃましちゃって、つまらない話で。」

後輩「そんなことはありませんよ。いろいろ参考になりました。」

先輩「うれしいこと言ってくれるね。じゃあ、がんばって。だけど、徹夜は

するなよ。あした、ぼうつとするから。」

後輩「はい。それと、カンニングもしないように気をつけます。」

先輩「そう、そう。特に、解けない問題のところは絶対見るなよ。」